

出版と図書館

- 問題提議** 出版と図書館，問題提起—
持谷寿夫（みすず書房社長）
- 報告** 子どもの本と図書館の関係について：いくつかの印象とともに
今村正樹（偕成社社長）
- 報告** 学術専門書出版社と図書館
黒田拓也（東京大学出版会専務理事）
- 報告** 実用書出版社と図書館
富永靖弘（新星出版社社長）
- 報告** 文芸書出版社と図書館
佐藤隆信（新潮社社長）
- 報告** 公立図書館の選書
小池信彦（調布市立図書館館長）
- 質疑応答** 来場図書館員との質疑応答
小池信彦（調布市立図書館館長）

分科会概要

「本」を図書館では「資料」と呼び、「読者」を図書館では「利用者」と呼ぶ。この違った言葉は何を意味しているのだろうか。それらの言葉が使われる世界はどのようなものなのだろうか。公共機関としての図書館には、関係の近さゆえに、著作者、出版者、流通など本に携わるそれぞれの人が理想の図書館像を描いていて、そのイメージを元にして図書館のありようを語る。絶対数も多くななく、サービスの内容が貸し出し中心であった時代は、それで良かったのかもしれない。だが、近年図書館の変容ぶりは著しい。資料の保存、貸し出し、というレベルにとどまることなく、各種のイベントや他サービスの充実、これまでの図書館像を大きく超えている。7月に行われた東京国際ブックフェアの出版シンポジウムでは、鯖江市、熊本市、名取市の各図書館の最前線に立つ図書館員の方々に各地域の図書館の現在を語っていただき、図書館現場の実際を聞き、具体的な変化を学んだ。やはり、知らない点は多い。今回の分科会では、逆に図書館

の方々に向けて、各分野の代表的な出版社（児童書＝偕成社、文芸書＝新潮社、学術・専門書＝東京大学出版会、実用書＝新星出版社）の出版活動の実態と出版物再生産の構造を報告、変容している出版の世界と課題についての認識を共有したいと考えている。読書のインフラとしての書店が、毎年多く閉店している状況を見ても、出版に携わる者たちと図書館が、知の循環のなかでどのような役割を担っているかを知ることが必要だろう。そのうえで、失われがちな読書環境の充実のための協働を模索していくことにつなげていきたい。出版人が折に触れて感じる図書館へのさまざまな疑問を投げかけながら、多くの図書館関係者との意見交換をしたいと考えている。
(持谷寿夫：みすず書房社長)

出版と図書館，問題提起一

持谷寿夫（みすず書房社長）

1 図書館＝公共図書館？

- ・なぜ公共図書館が出版界で話題になるのか？
- ・マス・セールスの出版の世界と図書館
- ・図書館の役割，インフラとしての出版物

2 それぞれの出版と図書館

- ・各出版社から

（児童書と図書館）

偕成社 代表取締役社長 今村正樹氏

（学術専門書と図書館）

東京大学出版会 専務理事 黒田拓也氏

（実用書と図書館）

新星出版社 代表取締役社長 富永靖弘氏

（一般文芸書と図書館）

新潮社 代表取締役社長 佐藤隆信氏

- ・ペーパー・バックと図書館

- ・新刊書，既刊書と図書館

3 出版と図書館

- ・知ることから始まる
- ・図書館への期待
- ・パブリック・リーディングのために

4 さまざまな疑問・質問

この分科会を開催するにあたり，出版界から図書館への疑問・質問をまとめてみた。これらの疑問に図書館の方々がどのような感想や意見を持たれるかを聞いてみたい。

子どもの本と図書館の関係について いくつかの印象とともに

今村正樹（偕成社社長）

日本での子どもの本は，歴史的には家庭内での熱心な読書によって育てられてきました。図書館という，公的な組織の中に子どもの読書が定着していくのは戦後のことです。日本における読書習慣の変遷をたどりながら，

かつては本の受け渡しの大切な場所であった書店が衰退している現在，図書館が子どもの本の出版活動に持っている意味，重要性を探ってみたいと思います。

学術専門書出版社と図書館

黒田拓也（東京大学出版会専務理事）

図書館が提供する重要なサービスのあり方とは，いったいどのようなものなのだろうか。近年そのあり方が大きく変容する大学図書館にも身近に接する機会がある，学術専門書出版社の一人として，公立図書館が持つべき能力について，本当の「読む力」の涵養および専門性という視点から考えてみたい。

実用書出版社と図書館

富永靖弘（新星出版社社長）

コンテンツの電子化の流れの中で，一口に本と言ってもそれぞれのジャンルによる役割が明確になってきた。実用書とは情報取得媒体としての本であり，もっとも電子化に犯されやすいジャンルである。だが，その歴史は古く，人々の生活に密着した，無くてはならないものである。図書館においては人文書のような独立したジャンルでは無いため蔵書が少なかったが，近年は需要も増えている。従来の書誌分類だけにとらわれず，分かりやすい配置に利便性を高め，読者の生活の質向上のために役立てて欲しい。

文芸書出版社と図書館

佐藤隆信（新潮社社長）

文芸書出版社の立場から，文芸書の特性と図書館の関係について考える。

出版社が多様な出版を継続でき，書店が存立する背景を説明，弊社刊ベストセラーの公立図書館 OPAC 調査の結果も実例として紹介する。また図書館が，一般に「読

書のための施設」と認識されることが、公立図書館と書店の役割分担を混乱させている点、さらに日本の「知の再生産」、そして図書館資料の未来も、いまや危うい土台の上に立っていること共通認識としたい。

報告要旨

公立図書館の選書

小池信彦（調布市立図書館館長）

図書館利用の拡大に結び付けて、端的には売り上げ減少の責任の一端は図書館にあるという考えがある。図書館の選書の現状として、職員、ツール、予算、収集システムの実態を確認し、あるべき姿とのずれから今後の議論の材料とする。

出版と図書館，問題提起一

持谷寿夫（みすず書房社長）

1 図書館＝公共図書館？

1.1 なぜ公共図書館が出版界で話題になるのか？

出版に携わる多くは、公共図書館を図書館そのものとしてイメージする。学校、大学、専門、他と役割に応じた図書館は存在するが、出版の世界では図書館と言えば、公共図書館を指すといっても良いほどである。

（この文中でも図書館は公共図書館）

なぜだろうか。

学校や大学や専門の各図書館での蔵書は利用者も特定されており、出版する側もそれらの図書館での読書機会の拡大は望んでおり、知る機会も多く、出版ビジネスにも貢献している。ところが公共図書館には、出版社が想定しているビジネスの循環には想定されていない性格の蔵書が多いため、図書館の存在と自らの出版活動を位置づけるのが難しい状況になっている。図書館での蔵書アイテムの多い一般文芸書や実用書の出版の再生産の構造は、図書館を経由して読者に届けられるというよりも、全国の書店を通して購入されるという前提のビジネスモデルになっている。出版物の売上げが鈍化し、図書館の数が増え、利便性が向上している現在、今まで意識しなかったその存在が相対的に意識されるようになる。

1.2 マス・セールの出版の世界と図書館

雑誌に代表される、マス・セールの出版物の効率的流通を支えにして、多様性ある少数の出版物と共存するのが日本の出版流通の特徴。この大量流通の仕組みを制度面から保証してきたのが再販制度や委託制度であり、機能している限り、読者からのできるだけ安価に、どこでも求めたいという要望に応えられていた。売上拡大の時代から減少の時代へ、書店で購入してきた読者が地域の図書館へと向かい、図書館に対してもマス・セールの出版物の蔵書を要求し、図書館もその要求に応えようとしたとき、図書館購入を前提にしないマス・セールの出版物を刊行している出版社は戸惑いを覚え、あらためて図書館の関係を考えなければならない状況になっている。

1.3 図書館の役割，インフラとしての出版物

図書館がそれぞれの地域に密着し、市民に役立つ公共機関として存在することは異論の無いところである。単なる貸し出しの場ではなく、近年おこなわれているさま

ざまなサービスは、現場に携わる方々の努力によって拡充され続け利用者の支持も多いことは出版に携わる者も理解している。

では、その図書館の存在のインフラとして必要な蔵書構成は、どのような基準が適用され、どのように選定されているのだろうか。さらに、その蔵書構成が図書館への評価対象項目とされているのだろうか。「貸出数」や「来館者数」といった数値化されやすい指標だけではなく、顕在化されていない利用者の要望を満たすことも図書館の使命であり、そうした選書をおこなうことが図書館人の専門性ではないかと、多くの出版に携わる人は感じている。

2 それぞれの出版と図書館

2.1 各出版社から

（著者～出版者～流通～読者）

多様な出版活動をおこなう出版社は、それぞれの出版物に適した循環の構造をもっている。その構造と、図書館がその循環のどこに位置づけられているのかを考えることはビジネスとしてではなく、パブリック・リーディングという概念が共有されていない現在、両者にとってなにより重要である。今分科会では、児童書、一般文芸書、学術専門書、実用書の各分野の代表的出版社からの発表を受ける。

（児童書と図書館）

偕成社 代表取締役社長 今村正樹氏

（学術専門書と図書館）

東京大学出版会 専務理事 黒田拓也氏

（実用書と図書館）

新星出版社 代表取締役社長 富永靖弘氏

（一般文芸書と図書館）

新潮社 代表取締役社長 佐藤隆信氏

2.2 ペーパー・バックと図書館

日本においてのペーパー・バックは、欧米とは異なる発展を遂げている。オリジナル版が増えたとはいえ、単行本刊行後、一定期間を経て文庫化という流れが、ペーパー・バックの生産の構造であり、この出版流通もマスの世界として成り立ち、やはり図書館を購入先と見るビジネスモデルではない。

読者拡大という観点からは、図書館での出会いが重要とはいいながら、図書館での蔵書は単行本を主体にし、文庫は個人での購入という棲み分けを求める声も多い。

2.3 新刊書、既刊書と図書館

新刊書とともに、既刊書の販売も出版社の利益構造に大きく関わっている。マスの出版物と同様に、既存のロングセラーが生み出す利益によって出版の循環は支えられている。近年の売れ行き不振は、既刊書の減少が著しいということでもある。結果として品切れになる書目も多く、読書の多様性は細ることになる。品切れ書が多いという現実、図書館の現場の方も実感しているのではないだろうか。まったく売れなくて品切れではなく、重版できる最低数が売れなくなったということ。図書館との関係では、出版する側は既刊書の選定も新刊同様に考慮してもらえればと思っている。そのために出版する側ができる手だてには何かあるのか。オン・デマンド版は購入対象になるのだろうか？

3 出版と図書館

3.1 知ることから始まる

図書館と出版は、否応なしに減少していく読書環境の充実、読者拡大の必要という問題意識は共有できる。だが、互いがビジネスとしての出版、市民価値の向上という視点を前面に出せば理解し合える部分は限られる。それぞれの価値観から生まれた世界は両者が踏み込んで知りたしななければ、自らの主張を発することの繰り返しにしかならない。図書館の機能が大きく変わっているなかで、出版する側は現状と課題を知り、社会的インフラとしての図書館の存在を認識する。図書館側は出版の再生産の構造を学び、図書館がその循環のどこに位置づけられているかを認識する。そのための交流の場も必要なのだろう。相互に「知る」ことから、あらたな信頼は作られるはず。

3.2 図書館への期待

出版する側からの図書館への期待は、刊行する出版物の性格によって変わる。少部数の専門性をもった出版の世界や児童書の出版は図書館を優先先と意識し促進活動もおこなう。では、マス・セールの出版の世界は図書館に対してどのような期待を持つのだろうか。

図書館を通した、先に見える読者の姿を出版する側はほとんど知らない。図書館利用者が何を讀もうとしているのかは、主に公表されているベスト・リーダーや予約数によって推定されるばかりである。図書館ならではの蓄積された資料の利用状況はわからず、マスの世界の出版物の利用状況のみが顕在化される。知りたいのは図書館の先にある多様な読書の実態と読者の姿である。

3.3 パブリック・リーディングのために

ビジネスという視点とともに、出版する側は「社会的インフラとしての図書館」「パブリック・リーディングとはなにか」を考える必要がある。知るための存在としての図書館への出版情報(近刊・文庫化・在庫)提供などは、拠点としての図書館の価値をさらに高めることにもなる。

見えないもの、効率的でないものをどうやって保証していくかは、「公共」という言葉の内実の一つであると思う。

4 さまざまな疑問・質問

この分科会を開催するにあたり、出版界から図書館への疑問・質問をまとめてみた。的外れも多いかもしれないが、これらの疑問に図書館の方々がどのような感想や意見を持たれるかを素直に聞いてみたい。

- 1 新刊書以外に既刊書も購入してもらいたいのですが。
- 2 図書館で文庫や新書を蔵書することは必要ですか。
- 3 図書館利用は無料が原則ですが、部分的な有料化は考えられますか。
- 4 図書館で利用者に刊行予定情報、文庫化情報、在庫情報等の出版情報を提供するの難しいのですか。
- 5 資料費が十分で無いのは知っていますが、増やすための手だては。
- 6 来館者数や貸し出し数は重要ですが、図書館でのサービスを測る指標には他にどのようなものがあるのでしょうか。
- 7 近年、図書館で多くおこなわれているイベントと読書推進との関連について知りたいのですが。
- 8 図書館の分類と発行している出版社での分類が合わないケースがあります。解決は難しいのでしょうか。
- 9 日々の業務のなかで出版社の存在を意識する時はありますか。

報 告

子どもの本と図書館の関係について いくつかの印象とともに

今村正樹 (偕成社社長)

これから私がお話しすることは、一切の客観的なデータを欠いた一出版人が抱いた印象に基づくものです。そ

の点で図書館が旨とする実証的な考察とは対極にあるものとなるでしょう。そうする理由の一つには怠けていて事実を調べる時間が無くなったためであり、もう一つは、実際に図書館の現場で働いておられる皆さんのほうが事実をよくご存じで、「それは違う！」と後の質疑のなかで追及してくださるであろうと思うからです。

さて日本人はよく言われるように世界的に見てもよく本を読む民族らしく（「読んだ」と過去形で言いたくないものです）、江戸後期以降一般庶民の識字率の高さを背景に、産業としての出版がたいへん盛んになりました。識字率の高さは商いで成功するという多分に功利的な動機によるものらしいですが、それは家族的な伝統として受け継がれ、読書は良いものだとする観念が明治以降の近代化の中でも、近代化そのものを推し進める一つの力となったと考えられます。

少しでも早く文字が読めるようになることは、変化する社会の中でわが子が成功することを願うすべての親にとって望ましいことであり、そのために本が身近にあることは生活の不可欠の条件でした。昭和の初期はもう暗い戦雲に覆われていたように思われていますが、実際には文化的におおいに成熟し子どものための本も数多く出されています。そして中流家庭以上という限定が付きながら、たくさんの家庭で読まれていたのです。

その文化的伝統は戦争に敗れたあとも続きます。むしろ民主化とともに家庭の総中流化が進むなかで、子どものための読書は一気に拡大していきます。この時期多くの児童図書出版社が生まれたのも、学校図書館という新しい市場が誕生したこととともに、家庭での購入の意欲が高まったという事実と無関係ではありません。何十巻もの児童文学全集が飛ぶように売っていたのが、昭和30年代の高度成長期でした。

しかしこの頃の本はとても高かったのです。おそらく今の物価感覚では7-8倍にするとほかの品々と釣り合う、という感じだと思います。すべての家庭が潤沢に本を買い入れることはできません。児童館の図書室や個人が運営する家庭文庫が、次々と生まれてきます。日本は1980年代までは完全な（公共）図書館後進国でしたが、その時代にあってもっとも普及していた図書館施設は、こうした児童図書室だったのではないのでしょうか。

このころの子どもの本について、どれだけの冊数が借りられあるいは買われたのかを比較する資料は、貸出記録が残っていないでしょうから多分存在しません。しかし1980年代は、出版の他の分野とともに子どもの本もたいへんよく売れました。ピークは1991年で、これは日本のバブル経済が破たんした2年後です。大人の本は

このあとなお5年を経て頂点を迎えるのですが。

1990年のとくに半ば以降、出版の市場が - ハリー・ポッターが刊行された何年かを除いて - 一貫して縮小している事実の原因は、突き止めることが大変に難しい。統計上見ると、一般に言われている読者の本離れという理由付けはどれも事実ではなさそうです。この時期は経済の泥沼の停滞と、それを脱するべく施策された公共事業テコ入れによる図書館のハコモノ建設が並行して進み、これらの図書館の充実がどうも出版市場の縮小の原因ではないかということが囁かれ始めました。そのうちに最近経済が多少の回復に向かっても、出版だけは取り残されているという事実から、やはり出版不況の原因は図書館か？ という議論が出てきました。が、これは別の論者に譲ることにします。

経済の長期にわたる停滞は、多くの家庭の家計を圧迫しました。私ども出版社は決して高いと考えていませんが、絵本や子どもの読み物も家計の負担となる時代が続き、子どもの本についても「所有から利用へ」という段階に入る人が普通になったのが、多分世紀の変わり目ころではないでしょうか。

では図書館は子どもの本の（販売の）敵になってしまったのか？ と言えば、決してそのようなことはありません。むしろ子どもの読書の有形無形のインフラストラクチャーとなったと、私は考えています。それはどういうことでしょうか。

今不況と言われながらも、なお年間3,000点以上の子どもの本の新刊が刊行されています。加えて今までに蓄積された膨大な既刊書のストックがあります。この中からどうやって子どもが本当に好きな一冊を見つけるのか？ いちいち買って読んでみるなど不可能です。しかも子どもたちの、本に対する嗜好は非常に多様で他の子どもの好き嫌いなどほとんど参考にはなりません。そういう時に、図書館は格好の「お試し場所」になっています。事実読者から戻ってくる愛読者カードには「子どもが放さない」「子どもが何度も借りてくたびれた」ので、とうとう購入したというコメントがよく見られます。それが地味な本であつたりすると、出版社冥利を感じるひと時でもあります。もちろん多くの子どもたちが例外なく好きで集中する本もありますが、それらは何十冊もの複本が揃えられて対応されています。そしてこれは子どもの本だけの特性ですが、読者のほとんどが相当なヘビー・ユーザーであるため、本は例外なく壊れ継続的に買い替え需要が発生しています。図書館は子どもの本の出版社にとって、大切な「お客様」でもあるのです。

しかし図書館が子どもの本にとってのインフラである

という本当の意味はむしろそのソフトの部分にあると私は思っています。つまり司書による選書です。子どもの本は多くのミリオン・セラーを擁しています。しかしそれらは大人のベストセラーのように短期間に出来上がるものではなく、何十年もの間じわじわと売れ続けることによって作られるもので、そのための大切な役目を図書館は果たしてきたと考えています。もちろん書店の店頭で長く売れ続けることも大切な要件ですが、数多くの新刊が日々店頭へ送り出される現状では、本当は長く読み継がれるべき本も簡単に押し出されていってしまう現状です。特に書店が毎日の売り上げを確保することに精いっぱいなのに、すぐには手に取る子どもが少なくても、これは将来にわたって読まれるべき本であると判断して図書館の棚に置くことがとても重要になっていると痛感しています。

子どもの本に限らず、図書館という存在全体を考えたとき、私たちは今を生きるだけでなく、連綿と受け継がれている歴史の時間軸をも生きていることを思います。戦後、市民としての権利意識が過剰に肥大化するとともに、現在を生きるわれわれの幸福の実現こそが、社会活動の至上目的となってしまったように見えますが、本当にそうでしょうか。予約待ち200番目の私が待つことのないよう200冊の複本を買うべきである、という利用者は今ある図書館と蔵書が、橋や水道といった生活インフラのように、過去の市民の負担と労力によって作られてきたことをぜひ考えてほしい。そして利便的な需要の複本ではなく、今の時代を反映しながら、次の時代にとって本当に大切に必要の蔵書を作り上げていくことに思いをいたしてほしいと思います。私たちはみな、過去を引き受けて今を生きる人間として将来に対する責任があります。図書館の蔵書はその一つの表明であるということを常に忘れずにいたいと思います。

報 告

学術専門書出版社と図書館

黒田拓也（東京大学出版会専務理事）

はじめに

1つの疑問から始めたい。

「朝の読書運動」（通称：朝読）というものがある。始まりは1970年代らしいが、この運動を推進しているトーマンの説明を見てみると、1988年に千葉県の高

校教師が提唱したことにより広がったようだ。その「朝読」の4原則というのがあって、「みんなでやる／毎日やる／好きな本だけでよい／ただ読むだけ」となっている。

以前から不思議に思っていたのだが、このような運動が広がっているのに（最近では「家読」というものもある）、小学生から大学生に至るまで、読むことの力が格段に上がったということはあまり聞かない。一般の社会人、いわゆる「大人」の読む力も同様だろう。

「読書」をすることは広がっているようだが、「読む力」は必ずしも伸びていない。なぜか。私なりに考えてみると、先に挙げた4原則の最後、「ただ読むだけ」ということに、とても大きな問題が潜んでいるように思う。たしかにみんな、相当な量を「読んでいる」のだろう。でもそのことは本当に「読んでいる」と言えるのだろうか。

「読む力」の涵養

慣れてくるとどんどん読む量が増えてくることは確かだと思うが、それだけでは字面を追う量が増加しているにすぎない。本当に「読む」ということは、そこに書かれている1行1行がどのような背景を持って書かれているのかということに想像をめぐらせ、またその1語1語の意味を深く考え、さらにあるまとまりをもった文章の内容が他の関連するものに繋がっていくことを自覚し、ただそうしているうちに自分の枠組みを超えた別の作品に出会っていく、というような一連の営みにあるのではないか。そうした運動ともいべきダイナミズムに気づくことなしに、本当の読書体験はできない。

上記のような活動は、大学における原書購読や専門の学術書を読み込むときに普通に行われることである。スロー・リーディングやディープ・リーディングと呼ばれることもある。ただこうした知的活動は、大学の中、あるいは一部の専門家だけが必要な能力ではなく、社会のさまざまな場面で活かされるべき大切な能力の1つなのではなかろうか。

学術専門書出版社の人間として、図書館（特に公立図書館）の皆様と考えたい、あるいはできれば行動を共にしたいことは、これまで述べてきた「本当の読書」とも言うべき読む力の涵養を、それぞれの地域の特性、構成される住民のあり方等を勘案して、1つのプログラムとしてつくりあげることだ。手間はかかることではあるが、読む力のある人材を多く輩出できるようにすることは、将来にわたって重要なことだろう。プログラムを考える際、地域に大学があれば、そうした訓練を十分に受けて

きた大学教員の力を借りて、協働で事業を行うことも意味あることだろう。

なぜこんなことを提案するかというと、図書館の蔵書というのはまさに「叡智の海」であり、それを十二分に活かすような力を、いくつもの世代にわたる住民の方々のなかに涵養することは図書館の役割としてとても重要で、図書館が提供しうる最高の住民サービスだと思うからだ。そうした力を多くの人たちが身につければ、利用される本のあり方も変わり、自ずと蔵書の構成にも影響が出てくるはずである。

「ただ読むだけ」では、何も変わらないのではないか。

図書館の専門性

ひところよく聞いた言葉に「ビジネス支援」というものがある。このコンセプトそのものは重要なものであり必要なことだが、本当に「ビジネス支援」を標榜できる図書館はいったいいくつあるのだろうか。身近な例で恐縮だが、私の住む町の公立図書館は比較的評判の良い、かつ蔵書量も豊富な図書館だが、そこに広く配置された「ビジネス支援」コーナーに並んでいる書籍を眺めていて、少し疑問に思ったことがある。

相当な種類の書籍が並んでいるのだが、細かな実務の入門書がただ固まっているだけで、ビジネス支援のあり方が全然浮かんでこない。あえて言うと、十進分類法ではさまざまところに配架されてしまう書籍を、「ビジネス支援」の名のもとにただまとめて並べただけ、という印象がぬぐえなかった。

ある大きなテーマが設定されたとき、そのことを十分に活かすための専門的かつ体系的な理解を、そのテーマを整える図書館の方がまずは持っていることが必要で、そしてその知識をベースに、適切な書籍のまとまりを編集し提案することが重要だろう。先に挙げた例のようなことだと、書店のフェアとなんら変わらない。

いますぐの現実的なことではないのかもしれないが、やはり司書の専門能力を高め、それと並行して、日本における司書のステイタスを名実ともに高める努力を、図書館界・出版業界（そして学界も）が協同して行くべきだろう。

図書館が持つ専門性を考える際、出版社の持つ知識というか発想が役に立つかもしれない。学術専門書出版社の編集者は、それぞれが担当する分野の専門家であるケースは少ない。ではなぜ学術書の企画等ができるのかといえば、編集者は関連する分野について一番詳しい人を知っているからである。わからなかったら、もっとも

適切な評価を下せる、あるいは何がポイントなのかが明確にわかっている人に聞けばよいのである。

先ほどのビジネス支援であれば、それぞれの地域においてそうした知識と経験を持つ人たちをネットワークとして司書や図書館の人たちが持てばいいし、それと書籍が有機的につながれば、例えば起業を考える際にも多角的な視点から考えられ、行政の支援との連動なども含めて情報を提供できれば、利用者にとってこれほど有難いことはないであろう。

おわりに

アクティブ・ラーニングなどが拡がり、大学図書館は情報コミュニケーションの大きな場になりつつある。公立図書館も、様々なレベルの違いはあれ、地域において、そうしたコミュニケーションの中心になるところだろう。そういうかたちにおいてデジタル化というものも初めて意味を持つ。

日々変化する大学図書館の現状を身近に接することができる学術専門書出版社の一人として、他の図書館のあり様の変化についてはつねに関心があるところだが、公立図書館が、これからの時代において、何を目的とし、何が住民あるいは広く社会にとって最高のサービスなのかをいま一度捉え返してみれば、現状とは違った姿が想像／創造できるのではないか。利用者の一人として、世界に自慢できるサービスを展開する図書館が身近にある未来を楽しみにしていきたい。

報 告

実用書出版社と図書館

富永靖弘（新星出版社社長）

はじめに

一口に「本」といってもそれらの持っている役割は多様である。同じ本でも読者の目的や立ち位置によりその役割は変化する。教養を得るために書かれ、読まれるもの。記録として書かれたもの。娯楽として書かれ、読まれるもの。学習補助やレファレンスとしての本。情報取得手段として書かれ、読まれるもの、等々。我々出版社は、本あるいはコンテンツの電子化＝単なる電子書籍では無いが、進んでからはっきりとその役割を認識するようになってきた。最初にレファレンス書物や地図が電子

化され、その後日常的に更新される情報書籍、そして恒常的な情報書籍が電子化された。

実用書とは、情報取得媒体としての本である。その情報とは抽象的かつ広範囲の概念であり、読者それぞれによってとらえ方は様々である。有り体に言えば、読んだ後に「(何かの)役に立った」と読者に言ってもらえればその本はすべて実用書であるといえる。ただし、先に例示したように、かつてのような単純な情報取得媒体としての本は電子化になじみやすく、犯されやすいコンテンツであるということ。WEBで簡単に情報の断片が取得できる時代になり、もっとも商業的影響を受けているジャンルである。形態は違うが、雑誌とは実用書の典型であろう。

このような状況の中で、実用書出版社が何を考え、どのような出版活動を行おうとしているかを述べて行く。

1. 実用書とは何か？

読者の「役に立った」という言葉を引き出すのが実用書の役割である。読者の要望はその生活スタイル、時代、地域、年代、性別などにより多岐にわたっている。それらをターゲットに設定している実用書出版社は広範囲なテーマをカバーしている。

書店においては一般的に生活実用書と趣味実用書にジャンル分けされる。生活実用書とは「料理」「手芸」「冠婚葬祭」「健康・家庭医学」「美容・ダイエット」「名付け・子育て」「ペット」など。趣味実用書とは「スポーツ・トレーニング」「アウトドア」「園芸」「パズル・ゲーム」「占い」「イラスト・絵画」「音楽」「その他ホビー」など。ほかに同様なジャンルを児童向けにした児童実用書や「ビジネスマナー」「起業」「簿記経理」「税金・年金」「離婚・交通事故・暮らしの法律」「マネー」などのビジネス実用書なども出版する。そしてマルチジャンルあるいはクロスジャンルである「雑学」と呼ばれるものが実用書出版社の主な刊行ジャンルである。

当社は創業80年以上たっているが、根本的に手がけているテーマは当時と今と大きな違いが無い。昭和の初期にも、戦中にもあるいは戦後の混乱期にも、そして現在も料理書は刊行している。時代と共に増減、発生・消滅するジャンルはあるが、人々の暮らしに根付いたテーマが主な刊行ジャンルである。

2. 実用書出版社の立ち位置

先に述べたように、実用書書籍は、マーケットイン＝

読者のニーズを把握あるいは想像して出版企画をすることが多い。もちろん、ある著者の独創的な主張や技法を紹介し広めて行くことも役割であるが、多くは今、人々が困っている、あるいは興味を持っているテーマを探し、読者のターゲットを決めて企画する。どこに住んでいる、どんな背景を持った人がどのような動機でその本を手にして買うか、ということ突き詰めるのである。

商品としての「本」をいかに魅力的で良い品質、手ごろな価格で読者に提供できるかに腐心する。内容以上にタイトル、カバーデザイン、本文レイアウト、イラスト写真の質などにこだわる。類書が多いため、販売戦略にも工夫を凝らす。書店店頭でのディスプレイやPOP、最近では期間限定の様々なサービス(おまけやプレゼント、書店でのポイントバックなど)を提案することも多い。唯一無二という商品・サービスでは無く、店頭で比較検討して選ばれる事が多いため、広告もあまり打たない。「並べるべし、広告すべからず」と言われた販売戦略である。一般的な本の出版というイメージより、商業商品開発という側面が強い。道具としての本の役割を追及しており、今後一層その精度を高めて行かないと、WEB情報との競争に取り残されてしまうという危機感を持っている。

実用書は、書店店頭では売り場がある程度確立しているが、図書館や書誌情報の分類においては極めてあいまいなジャンルである。このような商業性の強さやジャンルの曖昧さ等により、今までは出版界においては、実用書出版社はしっかりした立場が保てなかった。専門書版元のような同業団体も無く、「いわゆる読書」とは異質であるため読書推進活動にも縁が無かった。書店においても、以前はパートやアルバイトが担当するジャンルとされ、配本されたものを並べる事が主で、コーナー展開して積極的に品揃えをするという事も少なかった。文芸や人文書などとは一線を画していた。

そしてそれは図書館との関わりにおいても同様であった。

3. 実用書と図書館

大変申し訳ないが、私は、今回の全国図書館大会の報告者を依頼されるまで、図書館と真剣に向き合ったことが無かった。出版社としても営業活動も殆ど行っておらず、個人の利用者としても、学生の頃を含めても、あまり図書館を利用して来なかった。本は買って読むものであった。圧倒的に図書館に対する知識のインプットが少ないため、的外れなことを述べているかもしれない。余

談だが、現在中学・高校の二人の娘や妻は、自宅の2ブロック先にある図書館に足繁く通い、買う本と借りる本を使い分けているようだ。

今回の依頼を機に、何館もの図書館を見て歩いた。私が懸念していたように、実用書の内容と書誌分類が噛み合わず、読者が何を求めているかは多様であるが個人的には不便に感じた。「名付け」の本は哲学に、「腰痛・ダイエット」が自然科学、「ペットの飼い方」が畜産、「紅茶」の本は家政―料理と農業―園芸の双方の棚に分かれているところもあった。このような棚割が標準であるとすれば、出版社としては実用書をどのように図書館に薦めて良いかが難しい。

しかしながら図書館も問題意識を持っているようで、いくつかの図書館ではテーマ展示のコーナーがあり、そこには「起業」や「社会貢献」等のテーマに沿って様々な棚から書籍を集め、展示されていた。また、「実用書」というくくりのコーナーを設け、書店分類のような棚構成を取っている館も見られた。

また、特にビジネス実用書に見られたのだが、改訂前の書籍と改訂後の書籍が同時に並んでいる例がよく見られた。資料的価値としての蔵書なのか廃棄基準の問題なのかはわからないが、不自然に思った。

実用書は利用されてこそ存在意義がある。図書館で分かりやすい、使いやすい本と出会い、その本を所有したいという欲求が生じ書店で購入してもらおう。結果として読者の「役に立った」という気持ちを引き出す。

図書館図書としての実用書を通じ、読者の生活の向上に役立ち、書店での販売に貢献出来れば実用書出版社としての喜びである。

そのためにも是非、必要な本が探しやすい図書館、使いやすい図書館作りをお願いいたします。

最後に

最近高等教育レベルでも、社会に出てすぐに役立つ実践型教育を目指す方向がとられている。実用書はその最たるものである。今までの図書館の印象は、文芸以外は専門書が多く、近寄りがたい印象があった。先に述べたことと矛盾するが、だからといっていきなり大衆化した選書を望むものでも無い。バランスが大切である。教養書も実用書もそれぞれ役割がある。

例えば、ダイエットの本を読み実践し、それで効果が出れば良いが、失敗を繰り返したならば、それをきっかけに、栄養学の基本書やトレーニング・人体理論などの本を読み、自分の体に興味を持ち、知識を増やして欲し

い。そのようにして、様々な人々が、知識や経験を積み重ねてゆくこと手助けをすることが、実用書に限らず、出版の大きな使命だと考えている。

報 告

文芸書出版社と図書館

佐藤隆信（新潮社社長）

新潮社は、単行本や文庫が売上の6割を占め、中でも伝統的に文芸ジャンルを得意としてきました。今回は、文芸書出版社の立場から、出版と図書館について考えたと思います。

図書館では、本は「資料」と呼ばれます。図書館員の皆さんは、この「資料」をできるだけ多くの読者に届けようと日々努力して来られたと思います。しかし、もともとその「資料」は本という「商品」として企画設計されたものです。それはどんな特性をもった商品なのか？文芸書籍の成り立ちを少しご理解いただきたく、以下に記してみます。

文芸書は、特定の読者ではなく不特定多数の読者によりたくさん買っていただけるよう、出来るだけ安い価格を設定し、多くの書店に行き渡るよう可能な限り大きな部数を刷り、読者の目に留まるよう新聞広告等に宣伝費をかけています。もちろん用紙・印刷・製本にもお金がかかりますし、作家さんには製作した部数に応じて印税をお支払いする。さらに、編集、校閲、装幀等の経費も発生します。そうした上で読者の審判を仰ぎ、一部の幸いにして好評を得られた本は版を重ねることができますが、(その中のまたほんの一部がベストセラーとなります)、多くの本は初版止まりです。委託制のもと、返品は自由ですから、出版社の手元には、読者まで売れた分の金額しか残らない。低価格なので、初版止まりでは前に挙げた多くの初期費用をまかなうことは出来ません。重版がかかって、ようやく少しずつ利益が出るように定価が設定されています。多様な本を世に問い続けることが出版社の存在価値ですが、とてもリスクな商売と考えていただいても間違いありません。

新聞広告を見れば、毎月多数の新刊が出ているし、次々と新しい作家がデビューし、文芸書というのは華やかな世界に見えるかもしれませんが、しかし実情を言えば、最近五千部を売り切るのも大変です。毎月何十冊と出る文芸書の大部分が、「初期費用の壁」を超えられていません。上で述べたように、増刷され、「壁」を超えてさ

らに伸びるタイトルは、ほんの一握りです。そんなヒット作の利益で、他の多くの本の赤字を補い、次の本の出版をしていくのが文芸書出版社の実情です。このような構図は、実は本の販売拠点となる書店の商売にもあてはまります。毎週毎月買ってもらえる雑誌と平積みすれば右から左にずっと売れていく人気本があるからこそ、棚にあってたまにしか売れない文学全集や専門書を置くことが出来、バラエティに富んだ魅力的な書店になるのです。上野のアメ横は、年末の2、3日の売上があるからこそ、年中薄利の商売ができるといいます。そのように、出版界も一部の本の売上げで全体が成り立っていると言って過言ではないと思います。その文芸書の出版を支えている売行き良好書の販売冊数が、激減しています。このままでは日本の「知の再生産」の構図が壊れてしまい、多様な出版活動が衰え、ひいては図書館が資料を選ぶのも困難になってしまう、そんな危機に直面しているのです。「ベストセラーをなるべく早く読みたい」という利用者が多いこと、資料費を削る一方「貸出数、入館者数を増やせ」と要求する行政の理不尽についても承知しているつもりです。しかし将来の読者に良い本を提供し続けるために、つまり先の「危機」を回避するために、売れ筋の本については、図書館貸出が増えるより前に、まず書店での販売が伸びるよう見守っていただきたいと思っています。

現状はどうなっているのでしょうか。たとえば、本屋大賞をいただいた和田竜さん著の弊社刊「村上海賊の娘」の実例を見てみましょう。今年2月、全国3226の公立図書館のうち3113館についての調査の結果、「村上海賊の娘」上巻は全部で6768冊蔵書されていました。いわゆる「複本」と言われる数値を見れば、1館当たり2.17冊というのが全国平均でした。多いでしょうか、少ないでしょうか？ しかし平均値だけでは、問題を見誤るのではないかと思います。というのも、自治体によって、この種のベストセラーへの対応に関して、かなり方針の違いがあるように感じたからです。

具体的にいえば、首都圏、関西圏の財政が豊かな地域を中心に、人口1万人あたり1冊以上所蔵している市区が44あった。中には1館あたりにして12冊の複本があり、人口1万人あたりにすると2.65冊所蔵している市もあります。そこは富裕層が多い場所柄で有名です。「こんなに揃えて無料貸出する必要はないでしょう、ふところに余裕がある人は是非、買って読んでほしい」と思ってしまいます。一方、それと対照的に、財政は豊かで資料費も比較的潤沢ながら、蔵書が全国平均以下の1館2冊以下の自治体も散見されます。前述の1万人当たり

2.65冊の自治体の隣の市は、やはり富裕な地域ですが、所蔵は1館あたり1.3冊、1万人当たり0.43冊という数字になっていました。我々の「片思い」かもしれませんが、作家、書店、出版社に配慮し、ベストセラーの蔵書に抑制的なポリシーをお持ちなのではないかと感じます。書店の領域で競争するのではなく、書店と図書館の棲み分け、役割分担につながるのではないかと期待するわけです。

私見ですが、図書館を「読書のための施設」と見なす一般認識、この「読書」という言葉が公の機関である公立図書館と民業である書店の役割分担において混乱を招いているように思えてなりません。本を用いて人間は何をするかといえば、柔らかい方から挙げていくと、「楽しみとしての小説等の読書」、「教養の習得」、「学習」、「調べもの」、「研究」というような順になるのではないかと。図書館の役割分担で言えば、大学・専門図書館は、特定の分野についての深い「研究」や「調べもの」、都道府県立は幅の広い調査や研究に対応している。これに対し、市区町村立図書館は、「調べもの」から「教養」・「楽しみとして読書」の中間あたりまでが受け持ちではないでしょうか。そして、「学習」・「教養」・「楽しみとしての読書」が一般的な書店の領分であり、ごく普通に言うところの「読書」の領域です。ところが、「図書館は読書のための施設」との認識が根強いので、市区町村立図書館の大事な機能である「調べもの」への対応が不十分な一方、文芸書の貸出、さらには読みやすからと文庫の貸出までも大いに求められることになるのではないのでしょうか。

今年2月、日本文藝家協会が開催したシンポジウムは「公共図書館はほんとうに本の敵？」というタイトルでした。パネラーの一人、作家の佐藤優さんは、「私の答えは、『そうではない、味方だ』になります」と答えた上で、次のように発言しました。「我々がいま対立しているのは疑似問題にとらわれているからだと思います。本当の敵は、この20年間世界を席卷している自由主義、最近顕著になった反知性主義です」。先ほどの調査も、OPACという便利なシステムによって可能となったわけですが、あまりに便利なその貸し出しのシステムが、資料としての複本にその数以上の影響力を付加し、書店の脅威となっている面も多いと思います。問題とすべきは、効率主義一辺倒の行政や「住民ニーズ」と称されるものを絶対と祭り上げる風潮と考えます。これらは結構、手ごわそうです。図書館員の皆様が、これらに抗いきれないというなら、作家や出版社は助太刀のため、何等か声を上げなければならないでしょう。教養主義は古いと

言われるかもしれませんが、本当の本好きなら、教養主義の自制や節度に基づいて、古典と新刊、文芸書・教養書を見事なバランスで並べた図書館を支持するはずで
す。本好きに頼りにされ、文芸書、専門書、児童書、実用書を問わず、全ての出版社が応援するそんな「次世代の本好きを育てる図書館」になっていただきたいと思っています。

報 告

公立図書館の選書

小池信彦（調布市立図書館館長）

1 はじめに

「図書館無料貸本屋」「貸出至上主義」といった言われ方が図書館職員の多くには快く受け入れられているとは思われない。図書館が無料で利用できることで得られる社会の便益は大きいとか、資料提供をしっかりと行うこと、その方法として貸出がある、貸出を伸ばし、定着させることが重要だという考えはある意味正しい。少し古い部類になるだろうが、安井がまとめた「『無料貸本屋』論」¹⁾は中小レポート以降の論説を整理しており、図書館の選書を考える参考になる。

2 公立図書館はほんとうに本の敵？

あえてこの刺激的なタイトルを再度使うが、2015年2月2日開催の集会に参加、またその後の報告（「文学界」²⁾など）でその内容を知った人たちはいささかタイトルとの違いに戸惑いを感じている。図書館関係者の意見は堀の「公共図書館と出版界の関係をねじらせるな」³⁾などがあるが、自分自身が参加した感想、狭い範囲ではあるが、何人かと話した感想と一ほぼ一致している。

その戸惑いとは、これまで図書館が無料で大量に貸出するから売り上げが落ちたといった流れでの批判であり、貸出開始を猶予するとか、複本を置かないようにといった要望が主であったが、図書館が貸出することはよいが、せめて複本や文庫の取り扱いについて考えて欲しいという要望になってきている。その背景は今回の分科会を通じて理解したいと思う。

3 図書館の現状

日本図書館協会が毎年調査している統計では、一昨年の実績で、調査を初めて始めて貸出が減少したとしている。資料費の減少が影響していると分析することもできるが、それだけだろうか。

教科書的には図書館の三要素として、資料、人、施設とされている。資料の集積が図書館の根本であることは自明であるが、人はどうだろうか。人とは資料を収集・整理・保管する図書館員を指すとされていたが、利用者に注目する考えもあり、その場合、四要素という方がわかりやすいという考えもある。

3.1 資料費の状況

日本図書館協会調査⁴⁾の2012年～2014年調査によれば、資料費（決算）は減少している。経常の図書購入費は2014年調査では、2,174,003千円となっており、2013年調査から21,924千円の減である。

予算額は毎年増加しているが、実績での比較のために決算での比較が重要である。

3.2 職員の状況

専任職員は司書も含め減少し、非常勤職員、委託・派遣スタッフが増加している。

司書の人数を2012年調査と2014年調査で比較すると、専任は322人減少し、非常勤、委託・派遣は1248.2人増加している。非常勤等は専任職員との比較のため労働時間換算の人数となるため、実際にはより多くの人が図書館業務に従事しているのが実態であろうし、また、選書などの業務よりは窓口業務などに従事する人が増加し、専任職員は選書やレファレンスなど専門的業務を人数が減少する中でこなしている。

3.4 利用者の状況

個人貸出数や予約件数は2014年調査で調査開始以来、初めて減少した。貸出は町村立が市立より減少率が高く、予約は逆に増加している。

2014年版読書世論調査⁵⁾によれば、書籍を読む人は54%、読む人の1か月平均冊数は単行本で2.8冊、文庫・新書で2.3冊。小・中・高校生の公立図書館利用の調査を見ると小・中・高校生と年齢が上がるにつれて利用は減少する傾向はみられている。大人の利用傾向の調査はない。

貸出が減少している状況はある。借りないが来館して閲覧するケースもあるため、図書館を利用する人が減少していると即断はできないが、読書世論調査で読書する人が極端に減少している様子もないことから、読書に対

する意識が変わってきている可能性はある。図書館の利用が減り、印刷された本の販売も減って、電子書籍は伸びている傾向もあることから、従来読書といった場合、文芸書を読むことを読書と言っていたことから漫画のような出版物に対しても読書と捉え回答する人が増えるといったことはないだろうか。

4 選書の状況

日本図書館協会は中堅ステップアップ研修を毎年実施しているが、そこではコレクション形成をテーマとする科目を開講している。

講師は現役館長や経験者が努めていることから実践的な内容となっている。

4.1 選書のタイミング

後述する収集との関連もあるが図書館流通センター（以下 TRC）が提供する『週刊新刊全点案内』という冊子から得られる情報をもとに選書している図書館は正確な比率は把握できていないが、かなりの数に上る。

取次や取引のある書店等から見計らい送品図書と新刊情報（当日発売書籍のリスト等）を得て、選定している図書館もある。返品率との兼ね合いもあり、見計らい送品図書も年々図書館が希望する内容の要望に沿わない内容になり送品が減少している。

以上は日々刊行される図書の選書であるが、既刊については、新聞等の書評、利用者からのリクエストから改めて選書される。また、一年など一定の期間ごとに当該図書館の蔵書構成を調整するための選書が行われる。

4.2 選書の内容

要求論、価値論、その中間といった議論があるが、どれかに区分できるといった単純なものではない。報告者が図書館で働き始めたころに上司に言われたことは、選書は優先順位という考えであった。一つの図書館がすべての資料を持つことは無理であるが、選書することは優先準備を決めて収集する行為だということであるが、まだ経験の浅いものにはわかったような、わからないような説明でもあった。優先順位の付け方が一番の問題であるが、これまたストンと理解できる説明はまだ出会ったことはない。

いまは直接選書に当たることはないが、現場の悩みを聞いていて思うことは、この本がなぜここに登場したか（出版されたか）を考えているのだろうかということがあある。それは、同じような内容の本が続いて、あるいは同時に出版されることがああるが、そうした時になぜ？と考える、誰が読者として想定された本か？という、幾つ

かの視点があると考えてのことである。

5 収集

前述したように TRC と取引がある図書館は過半数を越えていることは間違いない。業務委託受託や指定管理者として図書館、自治体と取引がある。

通常は出版される図書は委託配本で書店に並ぶが、図書館は出版された図書から当該図書館に必要な図書を選択するため、すべての出版情報を入手し、そこから選書し、書店等へ発注（客注）する。その後の流れは書店の客注と同様である。書店との違いはそこに装備（図書ラベル、ビニールコートなど）を加わっていることである。

業務効率化のため、目録情報作成を外部化（MARC 作成）し、発注から装備付きでの納品までコントロール、トレースできるようにしている。

6 あるべき姿

図書館の役割、使命はなにか。そのためにどのような活動をするかが多様化している現状がある。最初に触れたように「無料貸本屋」と揶揄される現状は、「中小レポート」や「市民の図書館」で超える、あるいは現代の状況を踏まえたモデルがないことが背景にあるとされるが、「中小レポート」が求められた状況が現在でもありながら、獲得できていないが選書の問題を契機にあたらためて考え、発信していきたい。

- 1) 安井一徳 「無料貸本屋」論『公共図書館の論点整理』2006 年
- 2) 「公共図書館はほんとうに図書館の敵か？」『文藝界』2015 年 4 月号』
- 3) 堀渡「公共図書館と出版界の関係をねじらせるな」『出版ニュース』2015 3 月上旬号』
- 4) 「公共図書館統計」『図書館年鑑』収載
- 5) 『読書世論調査 2014 年版』毎日新聞社 2

第 101 回 全国図書館大会 東京大会
ホームページ掲載原稿

2015 年 9 月 30 日現在